

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ポレーシェ

なごやかな雰囲気にもまれて

ウクライナ講座が始まりました！

1月16日(土)、名古屋国際センター(NIC)で、第1回ウクライナ講座が開催されました。

今回は、前号のポレーシェにて大々的に予告し、中日新聞にも取材をお願いするなど、PRには手を尽くしたつもりでしたが、当日になるまでいったい何人の人達が集まってくれるのか、不安がいっぱいの開催となりました。

しかし、いざふたを開けて見ると、各地から26名もの参加者が集まり、急いで資料を増刷したり、紅茶用の紙コップを買いに走ったりと、スタッフ一同嬉しい誤算。

途中、ティータイムをはさみながら、キエフから留学生として来日中のイリーナさん(愛称…イーラさん)を囲んで、楽しい「地理」の勉強会が繰り広げられました。

ウクライナが、また少し身近な存在となって、私達の心の中に広がっていくのを実感した1日となりました。

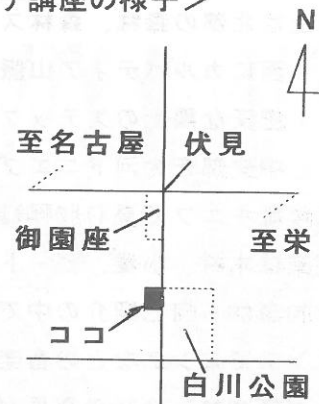
このウクライナ講座は、毎月第3土曜日(8月のみ第1土曜日)の13:30~16:00に開催され、今年1年続きます。

従って、第2回目は、2月20日(土)に、名古屋市の伏見ライフプラザで開かれる事になります。「都合により1回だけです」という方も大歓迎です。是非、お気軽に参加してください。

詳しくは、事務局までお問い合わせ願います。(J)



<ウクライナ講座の様子>



<伏見ライフプラザ>

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：中島しぐれ

郵便振替：00880-7-108610

☎/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:30~15:30)

ウクライナを知ろう 連続講座

連続講座の第1回目を、26人の参加者ととともに元気にスタートさせることができました。おそらく、日本で初めてのウクライナについての講座だと思われますが、ウクライナ大使館、名古屋国際センターの後援も得られ、本誌「ポレーシェ」とマスコミ各紙を通じての呼びかけに、中部各地から、男性、女性とも年齢層も広く関心を持って集まっていただけで、本当にうれしく思います。



スタディ・ツアーでキエフの街を案内するイリーナさん(右端)

今回のゲストはウクライナ・キエフ言語大学から名古屋大学に留学、日本語を学んでいるイリーナ・ベトリチェンコさん。彼女は救援・中部キエフ駐在員・竹内さんの大学の教え子です。

第1回目のタイトル「8000キロかなたのウクライナはヨーロッパ？」の通り、ウクライナは距離だけでなく、情報も遠くて、資料もほとんどありません。そこで今回は東京のウクライナ大使館で分厚い写真集など4冊を借りてきました。また、救援・中部のメンバーがキエフの本屋で買ってきた地図や書籍、民芸品などを持ち寄ったり、図書館で借りてきた本で今回のテーマ、ウクライナの地理について調べました。



ウクライナの国土面積603,700Km² } 72.7% ウクライナ人
 人口5,184万人(1994) } 22.1% ロシア人
 首都 キエフ(261.6万人) } その他

他の主な都市 リボフ(西部)、ハリコフ(東部)
 ヤルタ(クリミア半島)、オデッサ(南部)、ジトーミル(中央部)

国土は北部の森林、森林ステップ、南部のステップ圏から成る。

西にカルパティア山脈、南にクリミア山系があるが、肥沃な黒土のステップ大平原が広がる。

中央部を大河ドニエプル川が南の黒海に流れる。

気候はキエフで夏(7月の平均気温)21.3℃、冬(11月~3月)には-10~-20℃になるときもある。

産業は木材、小麦、ビート、ジュート(亜麻)、石炭など天然鉱物、機械工業ほか。

参加者から自己紹介の中で、「キエフに行ったことがある」「チェルノブイリに関心がある」「ダンスでロシアなどの音楽になじみがある」「スラブの研究をしている」など多彩な興味や関心が話され、今後の発展が楽しみです。ぜひみんなで調べ、楽しく中身の濃い講座にしていきたいものです。

そして今回は何といてもイリーナさんが人気の的で、次々に出る質問に対して、上手な日本語で丁寧に答えてくれました。彼女を講師にウクライナ語の勉強もしました。ウクライナ語のアルファベットの発音や簡単な挨拶などを学びました。次回も出席してくれる予定です。

第2回目はゲストに山崎タチアナさんを迎えます。「ウクライナ人はどこから来たの？」スラブ民族の歴史に迫ってみましょう！

(K)

ウクライナへ行ってきます

河田昌東

ウクライナは今最も寒い季節。なのに何でこんな時期に？などと言わないで下さい。これは事故処理作業員たちの被曝・生活実態調査の一環なのです。

私たちは、1 昨年から原発事故で被曝した作業員の団体である、「チェルノブイリ事故処理作業員協会」や「チェルノブイリ障害者協会」などのメンバーに医薬品を供給したり、現役で、汚染地域で作業する消防士さんたちに被曝防護用の機材などを援助しています。昨年 5 月に来日した、アントニュークさんとオレグさんは前者の団体のメンバーです。今年度は外務省の ODA 補助金も得られ、医薬品として 200 万円、機材を 132 万円援助します。こうした援助が有効に使われるように、事故処理作業員の方たちに会い、彼らの被曝による病気や生活の様子などの聞き取りを行います。また、これらの人々の被曝と病気の関係を事故直後から調査している研究者 (Ms. Ganzha) にも会い、話を聞いたり統計データも頂くことになっています。また、チェルノブイリ事故の後始末に責任のある行政担当者とも会い、現在のウクライナ政府の考え方、実状もお聞きする予定です。

今回訪問のもう一つの目的は、昨年、原富男さんが出かけて、完成してきたナロジチ病院の外来棟の暖房の様子を確認すること、及び昨年末にドイツの

Draeger 社から購入し、やっと搬入が終わった、人工呼吸器の確認に、ジトーミル州立小児病院を訪問する事です。さらに、移住者の村、ゼレムリヤ診療所では昨年買った滅菌器や医薬品の様子を見たいと思っています。こんな訳で、出発は 2 月 9 日、帰国は 19 日で現地滞在は 8 日間ですが、毎日車で走り回る日程で、結構忙しくなりそうです。しかし、初めてではないので顔見知りの方々にお会いするのが唯一の楽しみです。今回も通訳は竹内高明さん。彼は、キエフではすっかり日本人たちの世話役として人気者です。

それにしても、折角ウイーンで一泊するというのに、自由時間は夕方の数時間だけ、というのは残念至極です。



事故の際、現場で指揮をした元チェルノブイリ省副大臣ガトフチツ氏の追悼集会。ジトーミルの自宅前で (96年4月25日)

ウクライナ⇄日本 <情報ホットライン>

この2ヶ月に、10往復以上 FAX通信をしています。ほんの一部ですが、読んでください。

- 12/9
ウ⇄日
- ・ やっと（原さんの配管工事用の）荷物を受け取る事ができ、事故処理作業者協会に手渡す事ができた事をお知らせできて嬉しいです。ご承知のとおり、すべての手続きに約70日かかり、たくさんの書類と神経を使いました。荷物の受け取りに費用がかからなかったのは幸いでした。おかげでこの障害は乗り越える事ができました。
 - ・ 最近、私達はあなた方の支援金で、ゼレムリャ診療所に自転車を買いました。値段は、526グリブナ（約2万円；自転車 2台、タイヤ 4本、ポンプ 2台）でした。
- 12/10
日⇄ウ
- ・ 荷物の受け取りというよいニュースを、首を長くして待っていました。困難な問題の解決に、多くの努力をしてくださりありがとうございます。この道具が、消防署の仕事に役立つ事を願っています。いずれにせよ、今回は、救援物資を送る困難や、あなた方の官僚制度について、多くの事を学びました。あなた方の社会システムはうまく働いておらず、それが人々の生活に困難をもたらしているのでしょう。
 - ・ ゼレムリャ診療所の自転車購入に関する仕事に感謝します。看護婦さんや医師達も、患者さんの所へ行きやすくなった事でしょう。私たちもうれしいです。
- 12/18
ウ⇄日
- ・ この数日間、私達はきわめて困難な時間を過ごしました。私達の税務当局が、10月（9月も 8月も）に外貨口座へ受け入れた救援金の、20%を消費税として支払うよう要求したのです。この金額が、私達にとって極めて高額であるという事はわかりますよね。私達は、キエフの政府委員会やあらゆる機関に対して、この要求が正当ではないと言う事を証明する、たくさんの手紙を書きました。今週になって、税務調査があり、やっと大統領令によって「確かに救援金は無税である」という通報を受けました。私達はこの戦いに勝ったのです。しかし、神経をすり減らしました。
- 12/25
ウ⇄日
- ・ メリークリスマス！！ アントニュークさんたちも、私達の祝福に参加しています。まず始めに、皆様のご健康とご休息をお祈りいたします。あなた方もご存じのように、「KANPAI（乾杯）」の事を、私達は「BUDMO（ブーディモ）」と呼びます。
- 1/7
日⇄ウ
- ・ メリークリスマス（㊤ロシア正教のクリスマスは1/7 です）そして新年おめでとう！クリスマスカードは、もう受け取る事ができたのでしょうか？
 - ・ 昨年12月19日に、私達は星美学園のクリスマス会に招待され、同校からたくさんの粉ミルク代と車イス 2台を寄贈されました。
 - ・ 私達は、今年新たに「ウクライナを知ろう」という公開講座を始めます。この講座によって、多くの日本人がウクライナに興味を持ってくれるよう期待しています。それに今年は、2回目の「スタディツアー」も計画中ですよ。
- 1/15
ウ⇄日
- ・ クリスマスカードは確かに受け取り、「ジトーミル市立小児病院」「消防署の幼稚園」「汚染地域の消防署の子ども達」「孤児院の子ども達」等に届けました。あなた方の新しい講座「ウクライナを知ろう」を歓迎します。スタディツアーに関して言えば、私達はいつだってあなた方を大歓迎します。日本の小さい子ども達が、いつも私達を支えてくれているという事を知ってとてもうれしいです。（以下 次号）

車椅子の寄付ありがとうございます

① 平成10年12月19日(土)

「星美学園小学校」の子どもたちから、車椅子2台の寄付がありました。

② 平成10年12月22日(火)

「オヴァ・ママの会」会長、今飯田香盛氏のご好意により、車椅子11台の寄付がありました。

この11台の車椅子は、伊那の原さんの倉庫で船積みの日を待っています。

③ 平成11年 1月25日(月)

「ワタキューセイモア(株)名古屋支店」支店長、達川勲氏の紹介により、介護用品を扱う多比良(株)から車椅子10台の寄付がありました。楽園アパートの一室を間借りし、船積みの日を待っています。(写真)

④平成11年 3月吉日搬入(予定)

「日進医療器(株)」から昨年秋、第2回目の車椅子寄付の申し出がありました。第1回目の15台の車椅子は、既にウクライナの子ども達に贈られ、お礼の手紙が届いています。



クリスマスカードの報告



12月17日「大垣むらさきつゆ草の会」に集められたクリスマスカード515通を航空便で発送。

12月18日「救援・中部の事務局」に集められたクリスマスカード321通を航空便で発送。

1月15日 移住基金からの FAX で、『発送したカードは1月4日に受け取り、「ジトミル市立小児病院」「消防署幼稚園」「汚染地域の消防士の子どもたち」「第42幼稚園」「孤児院」に配布した。』という報告がありました。

心のこもったすばらしいカードを送ってくださった皆様、ありがとうございました。

「ほんとうに現地の子ども達に、クリスマスカードが渡ったかどうか知りたい。」とのご要望がありました。

この2月に、河田事務局長が現地へ行った時に確かめて報告をします。もうしばらくお待ちください。

読者からの手紙 (沼津市：多々良守澄さんより)

私は、静岡に住む17才の高校生です。 何年前、母がミルクキャンペーンに私の名前で協力し、それからずっと「チェルノブイリ救援・中部」から送られてくるものを読んでいました。

いろいろなことを考えながら、私には何ができるのだろうと思い…それでも、ほんの少しの勇気がなく、ただただ送られて来るものを読んでいるだけの毎日でした。

しかし、今回“クリスマスカード”を贈るということで、これなら自分にも…と思い、不器用ながらも作りました。自分の作ったものが「遠い国の誰かに届く」と考えただけで、とても楽しく、楽しみながら作りました。テスト期間中での勉強の台間でしたが、一生懸命心をこめて作りました。このカードをウクライナの子どもに届けてください。このような私にもできるものには、どんどん参加したいと思えます。

P.S. 私は、「自分がこのクリスマスカードを作って贈った」ということが、とても感動的だったのです。

『チェルノブイリの祈り——未来の物語』

スベトラーナ・アレクシエービッチ著

松本妙子訳（岩波書店刊）

チェルノブイリから10年の1996年に出版されたこの本は、チェルノブイリ事故そのものではなく、チェルノブイリを取りまく世界のこと、見落とされていた歴史についてを、原発の従業員、科学者、医学者、兵士、移住者、サマシヨール（強制疎開から自分で戻ってきてしまっている人）など、職業も世代もさまざまな人たちの言葉により浮かび上がらせたものです。チェルノブイリ、——大惨事以上のもの、過去に経験したことのないもの、うち勝つことができないとわかり忘れたがっているものを、著者自身も放射能で汚染された“チェルノブイリの実験室”と言われるベラルーシに住む目撃者として、人々の重い口から《手の加えられていない真実》を引き出し、未来へ提示したインタビュー集です。

消防士イグナチェンコの妻リュドミーラの言葉から始まります。「何をお話しればいいのかわかりません。死について、それとも愛について？それともこれは同じことなんでしょうか？…私たちは結婚したばかりでした。…私たちは夫が勤務している消防署の寮に住んでいました。二階に。寮にはほかに若い家族が三家族いて台所は共用でした。…夜中に外がざわついていた。窓からのぞいてみたんです。夫は私に気づいた。換気扇を閉めておやすみ。発電所が火事なんだ。すぐに戻るよ。…」この後、ほとぼしるように語られる事故当時の様子は、何冊かの本や写真集、ビデオフィルムで知られています。大量に被爆し、急性放射線障害でモスクワの第六病院に送られ、鉛の棺で埋葬された消防士たち。今までの活字や写真ではなく、リュドミーラの声で息づかいも体温も感じられるくらいにドラマチックに迫ってくるのです。チェルノブイリを戦ったひとりひとりの“生”。彼女の言葉を聞いて、私たちの友人、ウクライナの消防士アントニウクさんたちが語ってくれた話とつながっていきます。そうなのです、彼らの英雄的、犠牲的行為の陰にあった家族、妻や子供たちの心、愛や悲しみの数かず。

「最初この村に放射能があると言われたとき、私らは思ったもんです。かかったらすぐ死んじゃう、そんな病気のことだと。違うんだ、といわれた。それは地面に落ちていて、土の中にしみ込む。動物は見たり嗅いだりできるかもしれないが、人には見えない、そんなもんだと。でもうそっばちですよ！私は見たんだから。そのセシウムとやらはうちの畑に転がっていて、雨が降ったら流れちゃいました。インクのような色で、かけらがきらきらしとった。…青いかけらが一つ、…大きさは頭のスカーフくらい。…四つ見つけたかね。一つは赤色だった。……家のそばや道路に書かれたんですよ。70キュリー、60キュリーと。自分の畑で取れたジャガイモでずっと生きてきたのに、今度は食べちゃなんだと！……偉い学者さんが来なさって、薪は洗って使えと集会所で演説しました。もう、おったまげたよ！……水が汚れているんだと！何が汚れてるもんかね。あんなに澄んでいるのに！…みんな死んじゃうよ、村を離れなくちゃならん、疎開しろと。おやまあ！窓の外をごらんなされ。かささが飛んで来とります。……」



〈文通家族と対面する訳者の松本妙子さん〉
96.4月 スタディアア-;ジ-ミルにて

「…夏に孫たちがやってきましたよ。最初の何年かは来なかった。恐れていたんですよ。今じゃ訪ねてくるし、食料品もやればなんでも持って帰ります。……／私は誰も恐くない。死んだものも獣も。…もしかすると神様はいなさらんのかもしれん。別のだれかかもしれん。あの高いところには、だれかいなさるんだよ。だから、私が生きておるんです。……」サマシヨールといわれる人たちを無知と言えるのか？彼らの長い人生哲学や祈り。チェルノブイリを大きな代償に、世界中がかけがえのない一つの地球だと知りました。近代技術の持つ正と負。今いっときの便利さにどっぷり漬かりながら未来を憂えている私たちの滑稽さ。いつまで私たちは生かされるのか？“大勢の人が語る言葉は歴史”。なにより、人々の声を聞きましょう。

「……復員後すぐに二級の身体障害者になった。二十二歳でしたよ。大量の放射線を浴びました。バケツで黒鉛を引きずった。10,000レントゲン。着替えもせず原子炉の上で着ていた軍服とブーツのままでした。動員解除されるまで。…／行くべきか、行かざるべきか？飛ぶべきか、飛ばざるべきか？僕は коммуニストだ、飛ばないわけにはいかなかった。パイロットが二人拒否した。妻が若く、子供がまだいないからといって。そいつらは軽蔑され、罰せられた。…あいつらの気持ちもよくわかるんです。…発つ前に僕は警告を受けた。国家の利益のために、見たことをいふらすなど。しかし僕は以外には、あそこで何が起きたか、誰も知らないんです。僕は、全部を理解しているわけじゃないが、全部見たんです」（兵士たち）

「…僕はこの惨禍からいかにして意味あるものを引き出せばいいのかわからないでいる。なぜなら、チェルノブイリは僕ら人間の経験や、人間の時間で推し量ることができないからです。…」（エフゲーニイ 大学講師）

「…森を葬りました。樹木を1メートル半の長さに切り、シートに包んで放射性廃棄物埋設地に埋めたんです。夜、寝つけなかった。目を閉じると、何か黒いものがゆらゆらしてひっくり返るんです。生きもののように。……」（アルカージイ 事故処理作業員）

「…息子は血液の病気です。この子は死ぬんだわと思う。…トイレで泣きました。…ママ、僕を病院からつれてって、ここにいと死んじゃうよ。みんな死んでるんだもの。どこで泣けばいいの？トイレ？あそこは行列よ。私のような人たちはかなりなんですもの。…」（母親たち）

「…まだ経験したことのない新しい感情、私たち一人一人には個人の生活があるんだということ。…今度は人々は考え始めたのです。自分たちが何を食べるのか、子供に何を食べさせるか。健康に危険なものは何で、安全なものは何か？ほかの場所に引っ越すべきか、否か？…」（ゾーヤ 環境保護監督官）

「…でも、これもやはり一種の無知なんです。自分の身に危険を感じないと言うことは。私たちはいつも<われわれ>と言いく私>とは言わなかった。<われわれはソビエト的ヒロイズムを示そう>全世界に！でもこれは<私>よ！<私>は死にたくない、<私>は怖い。チェルノブイリのあと、私たちは<私>を語ることを学び始めたのです、自然に…」（ナターリヤ『チェルノブイリの子供たち』代表）

著者の国ベラルーシでは発禁のこの本の中の言葉は、どれも聞き漏らすことができないものです。チェルノブイリがもたらしたものを彼らとともに見つめていきたいと思います。（K）

同朋高校の「自由選択講座」に参加しました！

神野 英樹

名古屋市東区にある私立同朋高校には、ユニークな授業「自由選択講座」があります。

これは、通常の授業とは別に、「先生や生徒、あるいは一般の市民（お父さん・お母さん）が講師となって、『自由なテーマ』『自由に参加』を原則とした勉強会をやりましょう！」という

ものです。この企画がある事を、

支援者である内田温子さんに教えていただき、さっそく参加の申し込みをしました。



<同朋高校の「自由選択講座」のひとこま>

開催日時…1月23日（土）AM 9:00～10:20（1時限目）

講座のタイトル…「チェルノブイリの子ども達からのメッセージ」

内容紹介文…どうしても、皆さんに伝えたい事があります。それは、「ウクライナ」という国の子ども達からあずかってきたメッセージです。今から12年前に、この国で起きた「チェルノブイリ原発事故」は、広島・長崎に落とされた原爆の何百倍もの放射能を大地にまきちらしました。「今、このウクライナで何が起きているのか？」を皆さんに伝えたいのです。

当日の参加者は25名、初めて「講師」を体験する私の前に、たくさんの生徒さんが集まってくれました。事故当時は、まだ3～5才。詳しい事はよく知らない人が多かったとは思いますが、皆さん熱心に耳を傾けてくださいました。受講後に提出された感想文を読ませていただきましたが、私の伝えなかった事がよくわかってもらえたようで、参加して本当によかったと思います。

まだまだ伝えたい事がたくさんあり、次の機会に向けてさっそく準備を始めている私です。

感想文紹介

何の罪もない子ども達が、一番被害を受けやすいという事は、とても皮肉な事だと思った。戦争やこういった事故というのは、いつでも何も関係のない人達に被害がふりかかる。どうしてこういう事が起こるのか、疑問が浮かんで仕方がない。今日は、チェルノブイリの事故の被害、その後どうなっているのかを教えていただいた。事故当時よりも、現在の方が被害が大きいう事に驚いた。また機会があったら、今度は、なぜこのような事故が起こったのかを知りたいなと思った。（2年 S. T. さん）

原子力発電所は、日本にもたくさんあって、「絶対安全だから」などと言って、新しく作られたりしているけれど、人の作ったものに絶対こわれないものはないだろうし、放射能が外へもれ出したりしたら、人はもちろん、関係のないはずの動物も被害にあう。だから、きちんと反対運動をしたりして減らしていかないといけない。でも、実際の事になると、何も知らないなので、今さら放射能を分解したりして地球上から消せるのかどうかさえわからない。だから、せめてこれ以上増やさないようにしないといけないと思う。人の便利な生活よりも、少しでも安全な生活の方を、私は選びたいと思う。（1年 Y. S. さん）

竹内さんの ウクライナ便り

(チェルノブイリ救援・中部キエフ駐在員) 竹内 高明

<98. 12. 7>

今年はウクライナの冬は早く、11月に雪の日が多く、-19℃まで気温の下がった日もありましたが、12月に入ってプラスの気温に戻りました。ドル相場はこのところ1ドル=3.5グリブナ前後で推移していますが、そのうちまたぐっと下落するのではというウワサもあります。輸入品の値段は物により2~3倍に上がっている(8月のグリブナ下落前に比べ)様ですが、ウクライナ製品の値段は20%くらいの上昇率、しかし例えば私の給料は相変わらずの手取り180グリブナくらいですので、ドルに換算するとだいぶ目減りしました。

地下道の物乞いの人の数はこの寒さでも変わりません。

<99. 1. 6>

- ・独立後の7年間に、ウクライナの人口は200万人ちかく減少、ウクライナ保健省の予測では、2002年までに人口は4800万人に減るだろうと言う。男性の死亡率が特に増加している、600万人以上の国民が心臓血管疾患にかかっており、120万人は精神的に健康でない。

(『イズヴェスチャ・ウクライナ版』98. 12/17日号)

- ・ウクライナのインフレ率 (98年) 1~11月: 16.2% (『日々新聞』12/17日号)
- ・ウクライナ政府と国際通貨基金との覚書によれば、毎年20以上の炭坑を廃坑とし、99年より石炭産業に対する財政的援助を打ち切る。(『イズヴェスチャ・ウクライナ版』12/23日号)

明けましておめでとうございます、キエフでは曇り空ですが、+2℃くらいの暖かい正月です。昨年9月から主に4年生の授業を受け持たされ、けっこう難しいテキストを読ませたり、日本のTVドラマのビデオを見せたりするので、その準備にかなり時間を取られました、2月からの後期にはさらに2科目増える予定なのでもっと忙しくなるでしょう、私としては、来年度ももし可能なら大学でも教えたいと思っていますのですが、その場合は時間数を減らしてもらおうと思っています。一昨年と昨年は、大学の国際化を通して在留登録をしたので、フルタイムで働かないと登録してやらないと言う脅迫(?)を受けたためやむなくそうしたわけですが、もしほかの筋で登録することができれば、フルタイムで働く必然性はなくなります。(ただしその場合、ただでさえ少ない給料がさらに減ることになりますが、私としては時間がほしい)。

現在のドル・レートは1ドル=3.59グリブナ前後、ニンジン1規1グリブナ(以下単位はグリブナ)、タマネギ1規1.5、インド産短粒米1規3、ホット・ドッグ1個1.2、ビール500CC1.5、ウォッカ500CC4~7。

<99. 1. 13>

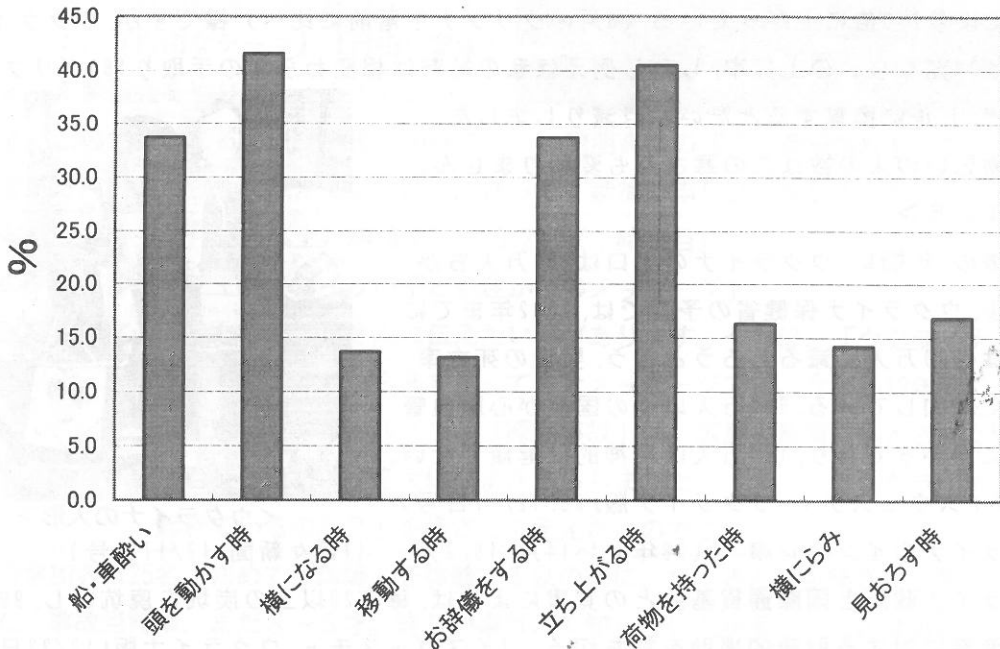
黒海の北東部、トゥアプセとイヴァラシイスクの間の海底調査で、セシウム137とストロンチウム90の堆積が発見された。50cm~1.5mの深さの海底に分布しており、その放射線値は安全基準(具体値は不明)の10倍に達している、これは明らかにチェルノブイリ原発事故により環境中に放出された放射性核種と考えられる。(『イズヴェスチャ・ウクライナ版』12/22日号)



<ウクライナの人形>

チェルノブイリのめまい

めまいのきっかけ

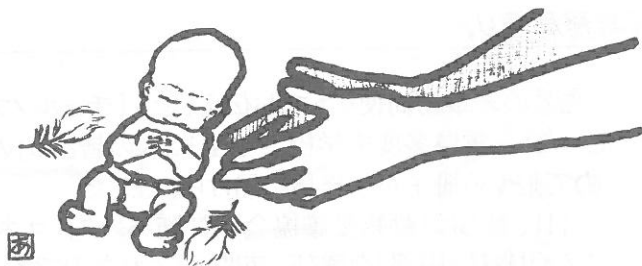


チェルノブイリの事故処理作業員たちの間に、いわゆる「原爆ぶらぶら病」のような症状が多く、それが原因で失業したり、アルコール中毒や自殺に追い込まれるなど深刻なケースも目立っている。ウクライナのコンスタンチン・トリナス医師は精神神経学的見地から、被曝者の調査を永年行ってきた。同医師の研究レポート「チェルノブイリのめまい」(1996年刊)を紹介する。対象は、事故処理作業員だった人、チェルノブイリ原発労働者、前プリピアチ住民、スラブジチ住民(注：事故後に作られた原発従業員のための新しい町)、キエフ住民など884名である。調査は前後1117回行われた。この中には、事故前の1984年と85年に検査を受けた人(対照：81人)も含まれる。これらの中で最も多い自覚症状は「めまい」であった。次いで多いのは脱力感や頭痛、不快感などである。通常一ケ

月に一回程度のめまいは病的と言わないらしいが、これらの人々の場合、1から100回が最大で約50%に上り、これ以上の人も30%いる。めまいの持続時間も一回数秒から数分が最も多い(約40%)が、中には数時間から数日(10・20%)、さらに長い人(22%)もいる。トリナス医師によれば、このめまいはチェルノブイリ被災者に特徴的で、ある日突然はじまり、長く続き、頭痛や心臓病など他の病気を伴うことが多い。しかし、一般にめまいと関係が深い高血圧とは無関係である。汚染地域住民や事故処理作業員、原発労働者に多く、これらの人々にその後現れる様々な放射線障害の最初の兆候である。この「チェルノブイリのめまい」は汚染地域や事故処理作業員、原発労働者などの間で次第に増加しつつある。

(河田)

山盛 三千枝



今回のミルクカンパは、不況などの影響を受け、減るのではないかと心配していた。ところが、予想に反して去年の暮れまでに、その前年より 80 万円も多いカンパが寄せられた。冷え込む雨の日に行なった街頭カンパも、多少功を奏したのかもしれないが、何よりチェルノブイリ救済足当時より続け、各地の人達がオリジナリティー溢れる取り組みをして、支援して下さる人達にもわかりやすい「馴染み」のキャンペーンとして定着したからだろう。

このミルクキャンペーンには思い出(?)が尽きない。90 年に始めて訪問団—といっても 2 人だけれど—が、ウクライナ行く際、500kg 程のミルクを救援物資として持って 行った。何もかも始めてのこと。必要書類は手書き、荷物を測るのに体重計の上に乗り自分の体重を差し引いたり、なんと素朴な準備風景だった。又、伊那がこのキャンペーンを担当した時、私もそこへ出かけた。バザーでは子牛が参加！したり、正月に、広びろとした凍てつくりんごの集荷場で、フォークリフトや梱包機を駆使しながらの手際の良い作業を手伝わせてもらった。(何しろ、伊那の人達はこの手の仕事等おちゃのこさいさいという風なのだ)それまでは全てが手作業で、腰痛が友、みたいな事もあったが、伊那での作業は「近代的！」と驚き、都会での作業はなんと手間暇のかかることをやっていたものかと呆れた。しかし、どちらにせよ、このように身体を動かして行くことが、ウクライナの被災者へのより強い思いを呼び起こしたような気がする。各地で、創意工夫をこらしたミルクキャンペーンが行われたことが懐かしい。

「ミルクキャンペーン」と聞くと、私には特別な思いがよぎる。私には兄が 3 人いたが、2 人が亡くなっている。長男は終戦の前年に生まれ、1 才にも満たない内にこの世を去ってしまった。戦時中という過酷な状況下で、何とか健やかに育てて欲しいと、両親の付けた名は「健一」といったが、容態の急変で病院へおぶって向かう父の背中中事切れたという。母は栄養失調で産後の肥立ちも悪く、お乳が出ず、もとよりミルクなど無く、その子も又栄養失調で、それが引き金となり亡くなったとのことだった。戦時中にはよくある話だったかもしれないし、そしてそもそもこの子が生命力の無い子だったせいかもしれない。だが、最初の子を、このような亡くし方をした両親の無念さと苦しみは、如何ばかりのものであったかと思う。2 人の息子を生き、育て、彼らによって生きてこられたという実感を持つ私は、この事を思う度にきしむような胸の痛みを覚える。——生まれて来る子どもに、命の保障をしてあげられないという意味では、「チェルノブイリ」は戦争そのものだ。その中で、全く無防備に、しかも抗う手立ても持たず、なされるがままにいたいけな子ども達に何か少しでも出来る事はないか。ミルクキャンペーンはそういう思いの中に位置付けられている。

「チェルノブイリ」は歴史の度々しい「負」の進行形の象徴であり、「チェルノブイリ」の人々の深く重い苦悩や悲しみ、生きる事への諦念は果てしない。それに対して、「救援」とは何のことかと思えばかりだが、一方諦めず、少しでも今の状況をよくしようとしている人々がいる。そんな「チェルノブイリ」の人々がいるのなら、一緒にやっていけるのだらうと思う。そして、私はその人々を支援するというより、その人々に励まされたり、支えられたり、救われたりしながらやっていくということだと実感している。

《事務局便り》

先号の《事務局便り》でお伝えした、「チェルノブイリ学習」のために事務所を訪問してくださいました「三重県多度中学校二年生12人の皆さん」の、感想文と報告集『人との出会いをもとめて』という冊子が事務局に届けられました。

当日、彼らは「動物愛護協会」「骨髄バンク」「ユネスコ」等々の分散学習の一つに、「チェルノブイリ救援・中部」を選び、訪問してくれたのです。予備学習でチェルノブイリを学び、この訪問で河田事務局長の話聞いて、「初めてチェルノブイリ事故とその被害者の実態を知った。」と書いている子がほとんどでした。そして、その被害の大きさに驚き、とりわけ様々な病気にかかっている子ども達のことを知って、「僕たちと同じくらいの子も達も後遺症に苦しんでいると思うと、心が痛みます。」と書いています。その子ども達に、「自分達は何ができるのか?」「どうすれば彼らを励まし、勇気づけることができるのか?」と、真剣に考えています。

「チェルノブイリ事故の放射能が日本にも襲ってきたことが初めて分かった。その頃自分達は幼くて、何も知らなかった。」…この言葉からも、彼らは、チェルノブイリは自分達に関わりの深いことなのだ気づいています。「このような事故を起こさぬように、僕達はいろんなことに注意しなければならない。」「原子力発電所の一つが事故になるだけで、世界中にも放射能が飛ぶのだから、原子力発電所はなくした方がいいと思う。」

夜、ふとんに入って寝るのが一番の喜びと思っていた女子生徒は、チェルノブイリの被災者が、忘れないでいてもらうこと、声をかけてくれることを一番の喜びとしているということを知り、「自分たちは何と平和なんだろう、これからは無駄遣いをしないで、募金しようと思った。」と書いています。

『救援・中部』のこの古くて小さいアパートにある事務局を河田事務局長の家と勘違いした子もいたり、名古屋へ行く電車を間違えて乗ってしまい胃が痛くなった子や、事務局長の心づくしのジュースを友達が三杯も飲んだと言って、その遠慮のなさを嘆く子がいたり、本当に事務局全員の顔の筋肉がゆるみっぱなしでした。

「チェルノブイリをもっとみんなに知ってもらおう!」「自分たちで、できることをして被災者を励ましたい!」と書いてくれた彼らに、救援の未来への光を感じることができました。

(松田)

編集後記

- このところ、インフルエンザのニュースが毎日のように報じられている。この時期「手洗いとうがい」は、神経質なくらいで丁度いい。健康であればこそ!(美)
- ついに、藤前干潟の「ごみ処分場計画」が白紙撤回となった。やれば出きるじゃないか、愛知県さん・名古屋市さん。私の働く会社の目前に、世界遺産となって残されることになるかも知れない。これは、歴史的な第1歩だ。2歩目は愛知万博、3歩目は中部国際新空港だという事も忘れないでおこう。(J)
- 『チェルノブイリの祈り…未来の物語』(スベトラーナ・アレクシエービッチ著;松本妙子訳)が、ついに出版された。前に訳者の妙子さんに、機会あって翻訳原稿の一部を読ませてもらっていた。幾多の困難を乗り越え、出版にこぎつけた妙子さんに拍手!! 皆さん、本屋さんで買って、是非読んでください。そして、同時代に生きるものとして、共に祈りを…。(京)